

令和3年6月議会報告

質問・答弁者	質問・答弁要旨
村上 直樹議員 (公明党)	<p>若年性認知症支援について</p> <p>(質問要旨)</p> <p>若年性認知症の支援につきましては、会派としてこれまでも何度か取り上げさせていただきましたが、先日、若年性認知症のご主人を在宅で介護をされている方とお会いし、様々な話を聞かせていただきました。</p> <p>その方のご主人は、中間管理職として介護の現場で働いていたのですが、52才の時にMC Iと診断された後、今までできていた業務が出来なくなったことがきっかけで退職を余儀なくされ、退職後は、暫くの間は居場所もなく、社会から取り残された孤立感と喪失感に襲われ、経済的な面からも生活に大きな影響があったそうです。</p> <p>医療機関では進行を遅らせるための投薬などが行われましたが、行政の窓口でも介護保険の説明はしてくれるものの、本人に寄り添った支援や今後の方向性などの相談には親身に乘ってはいくれず、困りごとなどの話を聞いてくれるところもないことから、暫くは不安な毎日を送っていたそうです。</p> <p>そのような経験から、今から6年前に、若年性認知症患者の居場所づくりのため、自らデイサービスを立ち上げられたそうです。今では若年性認知症の患者の居場所づくりや早期発見の大切さを訴え、講演活動もされているそうです。そこで、3点お尋ねします。</p> <p>1点目に、若年性認知症は現役世代で発症するため、制度の狭間の問題が生じ、障害サービスと介護保険サービスを使い分ける必要があるようです。この点については令和元年のわが会派の質問に対し、就労関係の障害サービスは、障がい者手帳がなくても医師の診断書があればサービスを利用できると答弁をいただきました。</p> <p>そこで、障害サービスの利用は生活支援に限るとされておりますが、例えば、社会参加や趣味の活動でも利用ができるのか、お伺いします。</p> <p>2点目に、若年性認知症の方は地域社会とのつながりを望むものの、働く場所が少ないと悩まれております。このような方が活躍できる場所について、どのようにお考えでしょうか。見解をお伺いします。</p> <p>3点目に、若年性認知症と診断されたばかりの初期から中期の方は、体は健常者と変わらないことから、高齢者施設では感覚的に落ち着かないため、ショートステイなどの利用がしづらいとの事です。そこで、初期の方が気軽に利用できる施設が必要と思っておりますが、見解をお伺いします。</p> <p>(答弁要旨)</p> <p>若年性認知症支援についてご質問、ご提案がありました。</p> <p>本市は「北九州市オレンジプラン」を策定しております。ここでは、認知症支援につきまして、「市民一人ひとりが、認知症を正しく理解し、誰もが安心して暮らせる『みんなで支えあうまち』」を目指す(つづく)</p>

令和3年6月議会報告

質問・答弁者	質問・答弁要旨
市長	<p>ことを、基本理念としております。</p> <p>若年性認知症の方は、現役世代で発症することが多いため、医療・介護に加え、就労や生活費、子どもの教育など、特有の課題が生じることとなります。</p> <p>これらの問題に対応するためには、発症初期の段階から、その症状、生活環境、本人の意思に応じた医療や介護、障害者福祉サービス、雇用などの適切な支援につなげることが重要であります。</p> <p>なかでも、働く場所など、若年性認知症の方が活躍できる場合は、地域社会とのつながりを維持する上で大変重要であります。</p> <p>本市では、平成29年度に、認知症支援・介護予防センターに若年性認知症支援のコーディネーターを配置いたしまして、個別相談等による支援を行っております。</p> <p>支援の事例ではありますが、職場の理解はあるが、迷惑をかけたくないとして、本人を退職させようとした家族に御理解をいただいて、就労が継続したケースがありました。</p> <p>また、発症を理由に退職し自宅に引きこもっていた方が、就労系障害福祉サービスを活用したケースなどがあります。御本人の活躍の場を確保する視点に立って、個別具体的な支援に取り組んでいるところであります。</p> <p>一方で、若年性認知症の方は、もの忘れ等の異変に気づいても、認知症と思わず受診が遅れてしまうこと、診断後も、本人・家族のショックにより相談をためらうこと、こうした理由から、対象者の把握が難しく、当事者・家族が求める具体的なニーズがつかみにくいといった課題があります。</p> <p>今回「北九州市オレンジプラン」を改訂いたしましたが、そこでは「啓発イベントにおいて、認知症の方が、自らの言葉で自身の思いを語る機会の創出」を掲げております。このような取り組みも、活躍の場の確保や本人のニーズ把握に寄与するものとして、活かしていきたいと考えます。</p> <p>議員お尋ねの社会参加や趣味の活動の場に行くために利用できる障害福祉サービスとしましては、地域での自立生活及び社会参加を促すことを目的とした「移動支援事業」があります。</p> <p>しかし、その対象者につきましては、屋外での単独の移動が極めて困難な重い障害のある方としております。若年性認知症の方が利用できるケースは極めて少ないと考えております。</p> <p>若年性認知症の方を対象とした施設につきましては、年齢層が青年期・壮年期・高齢期にまたがること、症状が多様であり、かつ進行する経過が急速であること、興味や関心が多岐にわたることから、個別課題に応じた、きめ細かなサービスの提供が求められます。</p> <p>このため、現時点では、施設の設置・運営は難しいと考えておりますが、今後も相談支援等を通じて、ニーズの把握に努め、民間活動の状況や他都市の対応についても情報収集を行ってまいります。</p> <p>若年性認知症の方への支援については、引き続き、市内の実態と</p> <p style="text-align: right;">(つづく)</p>

令和3年6月議会報告

質問・答弁者	質問・答弁要旨
<p>市長</p> <p>村上 直樹議員 (公明党)</p> <p>保健福祉局長</p>	<p>ニーズの把握に努め、更にどのような仕組みづくりを進めるか、総合的に議論を重ねてまいります。</p> <p>今後とも、関係機関や団体と、より一層の連携強化を図り、それぞれの方々の状態に応じた支援に取り組んでまいります。</p> <p>(質問要旨)</p> <p>ご答弁大変にありがとうございました。それでは第2質問をさせていただきます。</p> <p>ここの何日か前からですね、アルツハイマーの新薬が開発されたということですね、詳しくは全然私も分からないんですけども、当然専門家ではないので分からないんですけども、認知症の治療薬って、どちらかという、これまで進行を遅らせるということが主だったんじゃないかと思うんですけども、今回の新薬はですね、当事者であるとか、家族または介護者にとっては、本当に明るいニュースになったんじゃないかなというふうに思います。</p> <p>これは今後ですね、さらにまた臨床実験であるとか、また、日本でも承認されればですね、望む方がすべての方にスムーズに届くように、けっこう金額高いと記事にも出ておりましたので、すべての方に届くように望みたいと思っております。これは私の思いであります。</p> <p>それからですね、もう1点ですね、最近のニュースでですね、これは保健福祉局長にお伺いしたいんですけど、若年性認知症の方の働く場についてなんですけども、私が見たのは、一昨日の新聞に出ていたんですけども、福岡市で「認知症の人材バンクを設立」という記事を目にして、見られたんじゃないかと思うんですけども、これは全国の自治体で初めてとのことで、若年性の認知症に特化したというふうなわけではないかもしれないんですけども、記事の中にですね、40歳以上の患者というふうに出ていますので、これは私は含むものだと思います。</p> <p>いずれにしても認知症の人が活躍できる社会を目指すことが目的だということですので、詳しくもし分かれば説明していただきたいのと、あとできれば本市でも実施していただきたいと思っております。見解をお伺いしたいと思います。</p> <p>(答弁要旨)</p> <p>これは6月3日に福岡市の方がプレスリリースをしております。認知症フレンドリーシティの新しいチャレンジということで、このオレンジ人材バンクの設立をしたということでございます。</p> <p>認知症の人が参加できる人材バンクということで、認知症の方々の活躍の場の支援という形で、新たな取組みであると認識しております。</p> <p>北九州市といたしましても、「オレンジプラン」を策定しております。その中でこうした就労についての支援の在り方であるとか、</p> <p>(つづく)</p>

令和3年6月議会報告

質問・答弁者	質問・答弁要旨
<p>保健福祉局長</p> <p>村上 直樹議員 (公明党)</p>	<p>そういったところについては、こうした考え方とほぼ一致しております。</p> <p>さらなるプランの推進と併せまして、こうした取組みについても研究しながら進めていきたいと思っております。</p> <p>(質問要旨)</p> <p>ありがとうございました。あの、正にこれは私が望んでいたことだったんですね。</p> <p>福岡市発だったんですけど、記事を見た時に北九州市でもやってもらいたかったという思いがものすごく湧いていました。</p> <p>それからですね、若年性認知症って、先ほど市長からも説明していただいたんですけども、仕事がしたい、また社会と繋がりたい、地域社会の役に立ちたいというそういう気持ちがものすごく強いようです。当事者の方とも、また介護者である家族の方とも話をさせていただきました。そういう話を聞かせていただきました。</p> <p>また、仲間がいるということですね、またそのやる気や意欲を持つということをお伺いいたしました。</p> <p>但し、さきほど市長も説明していただいたように、症状がですね、日によって違ってくる。また、変化も早いということですので、このことからですね、なかなかその具体的に一人一人に対しての対応であるとか、メニューが、また支援が変わってくる、必要になってくるということで、そういうことからですね、なかなかその介護を個人でやるということがなかなか難しいんですということも、難しいというか困難だとお伺いをしました。</p> <p>そこで大事になってくるのがですね、先ほど市長からも説明いただきましたけれども、若年性認知症支援コーディネーターになるんじゃないかと思うんですけど、以前、わが会派からも質問させていただいたんですが、本市、北九州市では、平成30年度よりこのコーディネーターの業務を始めており対応しているということだったんですけども、そのときにですね、若年性認知症の方からの相談を通じて、効果的な支援方法を蓄積しながら関係者への情報発信、また就労支援など積極的に取組むというふうに答弁をいただいたんですけども、これは答弁いただいてからしばらく時間が経っておりますので、その後のですね、状況、どういう状況なのか、また人員配置等についてもお伺いできればと思うんですが、よろしくをお願いします。</p>
<p>保健福祉局長</p>	<p>(答弁要旨)</p> <p>背景としてまずありますのが、先ほどからご答弁しておりますとおり、やはり当事者、家族の方、なかなか早期の段階から接触が持ちにくいということが一点ございます。</p> <p>そしてまた、当然いろいろと状況に応じましてそのケースも様々ということでございます。</p> <p>(つづく)</p>

令和3年6月議会報告

質問・答弁者	質問・答弁要旨
保健福祉局長	<p>認知症支援・介護予防センターにはコーディネーターとして専任の保健師を1名配置しておりまして、個別の事案に対応しているという状況でございます。</p> <p>これまでの蓄積の中では、事例として1件に関わりますと、そういった方たちを家族の悩み家族に対して支援のネットワークも活用しながらアプローチしていくというような取組を行って行って、丁寧な個別の対応を行っているという状況でございます。</p> <p>それに併せまして、この数年間の間に支援のネットワークというものも、確かに増えてきております。</p> <p>ただ、今回ちょっとコロナ禍の影響がありまして、例えば、家族会とか行いまして、参加が少ないとか、そういったような形で、全体としての集まりが、以前は年間で50名くらい延べで参加いただいていたものが、昨年は20名程度とか、というような少しコロナ禍にあって影響が出ているようであります。</p> <p>ただ、しっかり今後もですね、蓄積や、ノウハウを生かしながらですね、関係団体とのネットワークを着実に広げていくような努力はしていきたいと思っております。</p>
村上 直樹議員 (公明党)	<p>(質問要旨) ありがとうございます。 あの、体制強化はできていないんですか。</p>
保健福祉局長	<p>(答弁要旨) 当然、コーディネーターとしては、1名兼任で保健師がついておりますけれども、当然、認知症支援・介護予防センターにはスタッフは他にもおります。</p> <p>当然、全体の流れの中でですね、チームとして動いておりますけど、個別のアプローチについての専門的な対応のところは1名の保健師が現在対応しているということでございます。</p>
村上 直樹議員 (公明党)	<p>(要望要旨) ありがとうございます。</p> <p>若年性認知症につきましては、市長または局長、様々答弁していただいて、いろいろ認識していただいているということで、家族会の方や当事者の方々、たぶん今日見られて喜ばれているんじゃないかなと思うんですけども、この若年性認知症のことにしましては、今後ですね、わが党派として提案、提言また取り上げさせていただきたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いをいたします。</p> <p>(以上)</p>